

介護職員自己評価表

2025年4月2日

事業所名	通所介護 デイサービスリハビリセンター瀬々串
------	------------------------

	正社員	非常勤社員
社会福祉士	5人	
介護福祉士	3人	
理学療法士	1人	
介護支援専門員	3人	
実務者研修修了者その他		1人
准看護師		

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よくできている	なんとかできている	あまりできていない	ほとんどできていない	備考
前回の課題に関する改善	15.2%	42.4%	27.3%	15.2%	

前回の改善計画	<p>前回計画では、認知症ケアで求められるコミュニケーションスキルを含めた対人援助技術の向上を目指した。今回の自己評価では、「対象者の接し方や態度」について半数以上(55.5%)のスタッフが、「仕事上の態度」について半数以上(66.7%)のスタッフができていないと感じていた。くわえて「意思疎通」については、半数以上(55.5%)のスタッフができていないと感じており、半数ほどのスタッフは意思疎通を通してコミュニケーションを図っている傾向がみられた。一方、4割弱のスタッフは認知症の方へのコミュニケーションを楽しんでいるなど、前回の改善計画については、一定の改善がみられた。課題は、前回同様に接し方が難しいと捉えているスタッフへの対応であった。介護技術については、介護の知見を有する外部講師による社内研修でスキルアップを図る計画とした。</p>
---------	--

前回の改善計画に対する取組み結果	<p>コミュニケーションスキルを含めた対人援助技術は、相談員と担当ケアマネジャーによりご利用者の習慣や癖、対象者の背景を把握し、家族との関わりを踏まえたカンファレンスを実施、適切なコミュニケーションにつなぐように努めた。ご利用者の性格等を踏まえたグルーピングにより問題行動の発生頻度は減った。メンタル支援は生活支援員が担い、有酸素運動やレジスタンス運動はトレーナー、機能訓練は理学療法士、健康観察は看護師が担当し、それぞれの専門職がチームを組んで支援した。支援の参加率は、理学療法士の個別機能訓練が最も高く、トレーナーや生活支援員によるパワーリハビリや有酸素運動も参加者が増えつつある。ご家族からの評価は上がり、ご利用者数は増加傾向にある。</p>
------------------	--

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)	よくできている(60以上)	なんとかできている(50~59)	あまりできていない(40~49)	ほとんどできていない(39以下)	合計
SECTION 1 対象者の接し方や態度について	11.1%	33.3%	44.4%	11.1%	100%
SECTION 2 仕事上の態度について	22.2%	11.1%	55.6%	11.1%	100%
SECTION 3 食事について	11.1%	44.4%	22.2%	22.2%	100%
SECTION 4 移乗や移動について	22.2%	22.2%	44.4%	11.1%	100%
SECTION 5 排泄について	22.2%	55.6%	0.0%	22.2%	100%
SECTION 6 入浴について	22.2%	22.2%	33.3%	22.2%	100%
SECTION 7 着替えや整容について	11.1%	66.7%	11.1%	11.1%	100%
SECTION 8 服薬について	11.1%	55.6%	22.2%	11.1%	100%
SECTION 9 意思疎通について	11.1%	33.3%	44.4%	11.1%	100%
SECTION 10 行動障害について	0.0%	77.8%	0.0%	22.2%	100%
SECTION 11 普通の生活やアクティビティについて	22.2%	44.4%	22.2%	11.1%	100%

自己評価及び改善が必要な事項	<p>個別の機能訓練は理学療法士により提供され、有酸素運動や集団で取り組むコグニサイズはトレーナーと生活支援員の連携により取り組まれ、巧緻作業や回想療法、顔表情に基づく心理療法等の認知症ケアは生活支援員により提供した。ご利用者からは支援内容を評価する声をいただき、「利用日数を増やしたい」「利用時間を延ばしたい」などの依頼を受けている。機能訓練の効果は、ご利用者だけでなくスタッフにも表れ、午前中のコグニサイズが楽しいと感じ、好んでおこなうスタッフが増えた。取り組みの結果、「興味のある話かわからない」とするコミュニケーションに不安を感じるスタッフは少なくなったものの、意思の疎通を重視する傾向がみられ、イントネーションやリズム、声のトーン、音量、間やため息などのパラ言語を用いて感情を読み解く手法を学ぶ必要があった。介護技術は、それぞれのスタッフの不得意な分野をOJTによりスキルアップを図り、メンタル的な課題は高頻度のスーパービジョンで支えている。</p>
	主任 梅津 豊

外部評価者	<p>こちらの施設は、機能訓練への参加意欲が高い利用者が多く、パワーリハビリ・トレッドミル・ニューステップなどの機器を用いた有酸素運動やレジスタンス運動により身体機能の向上を図っていました。機能訓練は、その効果を実感できている利用者が多く、高い評価を得ていました。コグニサイズ・巧緻作業は小集団で取り組まれ、回想療法・顔表情に基づく心理療法等で認知機能の改善を目指すなど、興味深い取り組みが提供されていました。一方、コミュニケーションが図れる比較的元気な利用者が多いことから、コミュニケーションに関する課題が生じやすい傾向がありました。また、介護技術全般のスキルが求められることで、技術面に不安を感じてしまう傾向もみられ、30分程度の残業で業務中に生じた課題を解消していました。これらについては教育プログラムの見直しが必要になるかもしれません。介護職員の性格に違いがあるように、技術の習得スピードや課題もそれぞれ違い、業務内の経験だけでは改善につながりにくい側面があるようですが、日々の課題はOJTである程度解消できると思われま。できるだけ業務内で解決できる仕組みを検討すべきかもしれません。スーパービジョンは高頻度でおこなっているようです。些細な事から相談できる面談を心がけてください。総合的な評価は、利用者に適した興味深い取り組みが複数提供され、多職種が協働してサービス提供していることが推察できました。</p>
	<p>〒891-0151 鹿児島市光山2丁目3-5 特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所 社会福祉学博士 岩崎 房子</p>

